

（研修の概要）

本研修は3月17日から3月21日まで計5日に亘り実施され、目的地は中国北京市、参加人数は16名であった。主な研修先は北京大学元培学院、清華大学日新書院、及び、清華大学新雅書院であり、研修3日目には万里の長城を訪問する機会も設けられた。

（研修の詳細）

研修の1日目は羽田空港から北京首都空港へのフライト、そして、北京首都空港から滞在先のホテルへの移動に費やされた。移動続きの1日だったが、実際には研修期間中、最も自由な1日のように感じられた。なぜなら、人間は一箇所に止まっている限り、身の回りの風景の固定化、あるいは、他人と関わることの必要、などの理由から、過去や未来の出来事が実態以上に自分自身を縛り付けている、というふうに感じてしまうからである。その点、旅の最中、特に、北京行きの飛行機の窓から眼下に広がる街の景色を眺めている間は、あらゆる風景から解放されていた時間だった。

研修の2日目は北京大学の元培学院（写真1）と北京大学考古学博物館（写真2）を訪れた。東京大学駒場キャンパスの数十倍はある広い敷地には、未名湖と呼ばれる大きな池や、丁寧に管理された木々、悠久の歴史を思わせる建物が多く立ち並んでいた。元培学院は、そうした建物の中の一つであり、100年の歴史をもつ。当初この建物では、旧ソ連より当時の最先端の科学技術を学習するためのロシア語の教育がなされていたが、時代が下り、中ソ関係の悪化や冷戦終結などの理由で、ロシア語教育は現在では行われていないようだった。

現在の元培学院では、異なる専攻の学生が寮で共同生活を送る傍ら、座学以外の活動にも積極的に取り組んでいるようだった。例えば、寮内にはシアタールームや図書館、自習室、カラオケボックス、ビリヤードルームなど凡そ日本の学生寮では考えられないような充実した設備が備わっていた。また、寮内にとどまらず、郊外の付属農園で農業活動を行い、外部から書道や油絵、音楽の講師を招き、教授を受けることもあるそうだ。

北京大学考古学博物館では、20世紀以降の中国考古学の輝かしい歴史が展示されていた。西洋の歴史学の手法を取り入れ、中国考古学は飛躍的に発展し、これまでは「史記」などの文献上でしか確認できなかった出来事の真偽を判定することさえ可能となった。しかし、中国考古学というアカデミアの制度の中で、無制限に増殖を続ける古代中国の歴史は、古代、蒼頡が漢字を発明し、鬼を泣かせ、天から粟を降らせたように、将来、中国の人々が今後の歴史を歩む上で、むしろ重荷となってしまう時が来るのではないだろうか。

研修の4日目には、北京大学と双壁をなす、清華大学の日新書院と新雅書院を訪問した。書院というのは、全寮制の学院を指し、日新書院では中国哲学や外国語専攻など人文科学系の専攻の学生が寮生活を送り、新雅書院では、コンピュータサイエンスから法学、経済学まで多種多様な専攻から学生が集まり、同じく寮生活を送っている。東京大学の三鷹寮や豊島寮と異なるのは、多くの教職員が彼ら寮生と共同生活を送っている点だろう。実際、新雅書院では、教員が学生を名前で呼び、親しげに冗談を言うなど、教職員側が個々の学生の気質、性格を熟知しているように感じられる場面が多かった。

他に特筆すべきことは、やはり高考のことだろう。高考とは、中国における、日本の共通テストのような試験で、大学進学を希望する中国の受験生は全て、この高考を受験する必要がある。北京大学や清華大学の学生が口を揃えて漏らしていたのは、この高考の点数が受験者の本籍地により調整を受け、その結果、特に都市部の学生は北京大学や清華大学などのトップ大学に合格し難くなる、という不満だった。また、就職に対する不満も多く聴いた。人手不足の日本と異なり、中国では、かつてない就職難が吹き荒れており、彼らのようなエリートでも就職率は8割を下回るようだった。

以上、今回の北京研修の中で、見聞きしたことを報告する。今回の研修を通じ、中国の学生がどう世界を捉え、何を考えているのか、その一端が掴めたように思う。そして、最後に、今回の北京研修を共にした仲間たちと、東アジア藝文書院の先生方に改めて感謝申し上げたい。特に、最終日のハプニングで多大なるご迷惑をおかけした石井剛先生には、感謝してもしきれない。

写真1：北京大学元培学院

(2025年3月18日, 筆者撮影)

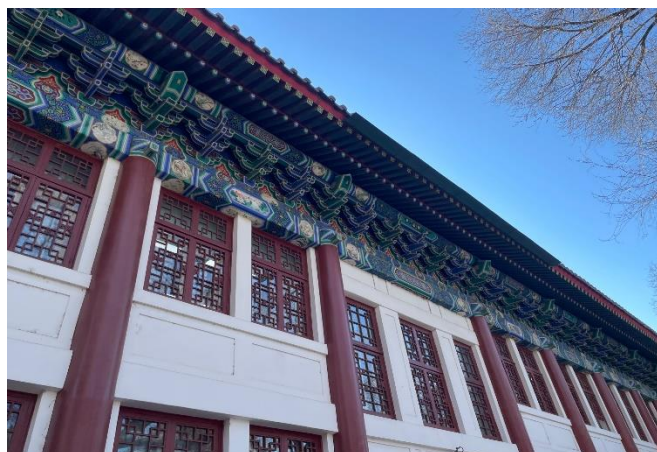


写真2：北京大学考古学博物館
(2025年3月18日, 筆者撮影)

